
時を巻き戻す救済者

那岐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時を巻き戻す救済者

【Nコード】

N8002I

【作者名】

那岐

【あらすじ】

齊藤雄祐は通学中、交通事故で死亡する。

しかし神から運命を変えるチャンスを与えられる。

その内容とは時を巻き戻し、人の死を防ぐというものだった。

第一話 生き返り

まだ間に合う。

初夏という季節に似合わず晴れなのか曇りなのかよくわからない天気。時刻はおそらく八時二十五分ごろ。

自転車に乗る俺はそう確信した。

この坂を下って信号を渡り最後に坂を上げればゴールだ。八時半の本鈴までにはまだ僅かに余裕がある。

今日遅刻しなかったら、今学期の遅刻数は20台に突入せず、連続遅刻数も8でストップできる。

が、猛スピードで坂を下る俺はついていなかったらしい。目の前の信号が赤に変わった。

まだ間に合うんだ。自分にそう言い聞かせブレーキを握る。自転車は止まろうとしない。もう少し強くブレーキを握る。それでも自転車は止まらない。思いつきりブレーキを握る。自転車はやはり……止まらなかった。

ブレーキ壊れてる!?

そう気づいたときにはもう遅かった。

時速50キロ近いスピードで坂を下りきった自転車はそのまま自動車の行き交う交差点へと突入し一台の乗用車と衝突した。

斉藤雄祐さいとうゆうすけとしての14年と少しの人生、短かったけど楽しかったな。最後にそう思うと視界は真っ白になった。

気がつくところは何もない空間だった。

ここは、どこだ？ 俺は死んだのか？

となるとここは死後の世界というやつだろう。

そこに突然2メートル近い長身で、白髪で白い髭をはやしてて、おまけに頭の上には輪まで浮かんでる、いかにも“神”といった感

じの人が現れた。

「斉藤雄祐」

「は、はい！」

突然現れていきなり名前を呼ばれかなり驚きながらも返事をする。

「お前は一度死んだ」

やはり俺は死んだらしい。

「はい」

「不運な上に後悔の残る死に方だったと思う」

「はい」

「そこで、お前に運命を変えるチャンスをやろう」

「はい？」

「運命を変える、つまり生き返るチャンスだ。お前には一度生き返ってもらう。まあこの時点での生き返りは仮だと思ってくれたらいい。単に生き変えるだけでない、『時を巻き戻す力』を与える」

「どうやらもっと高くなかった俺の頭の理解度は一度死んだことによって下がったらしい。言っている意味が全くわからない。」

「それだけではない、お前にはその力を使って死ぬ人を助けてもらう。つまり人が死ぬのを時を巻き戻して阻止してもらう」

ふむ、今度は少し理解できた。

「来月、つまり8月の終わりまでに10人の死を阻止すればクリアだ。その時点でお前の運命は変わりそのまま生き続ける事が出来る。また十人目を助けた時点でお前の力は消える」

「助けられなかった場合は？」

「お前の運命は変わらなかったということだ。続きも聞きたいか？」

「いや、いいです」

つまりはもう一度死ぬのだろう。

「うむ、力の使い方は簡単だ。時よ戻れといった感じに思えばいい。ただし巻き戻せるのは5分まで、また巻き戻した結果たまたま助かったという場合は数には含まない。あくまでもお前自身が助けよう」と思い、助かった人数のみを数える」

「わかりました」

「では健闘を祈る」

大方はわかった、ただ一つわからないことがある。

「あの、ちょっと待ってください」

「ん？　なんだ」

「どうして俺なんですか？」

「というと？」

「俺みたいな死に方をした人はたくさんいるはずです。どうして俺を助ける、というかチャンスを与える人を選んだのですか？」

そう、俺にはこんなチャンスを与えてもらう理由などなかった。神を信じていた訳でもないし、特別いいことをした記憶もない。

「ああ、それなら簡単なことだ。たまたま私がその場にいた、それだけだ」

「は？」

「お前はテレビで奇跡の生還などというものを見たことはないか？」
「あります」

飛行機が墜落して一人だけ生きてたとか、何万ボルトもの電気が体に流れても生きていたとかの話だ。

「そういう奴もたまたま私が見ていたからだ。そういったものもお前と同じような条件をだしてきた」

なんとなくだが納得した。不幸中の幸いといったところだろうか。消えかけた神が最後に言った。

「言い忘れたがその力を私利私欲のために使うと罰が当たるぞ」

次に気がつくところでは病院のベットだった。椅子に座り祈っていた母は目を開けた俺を見て驚いて大声で医師を呼んだ。

まだはつきりとしめない意識の中で俺は思った。この試練を俺はクリアすることができるようか。

自分自身に問いかけた。今までに人の死を見たことがあるか？

答えはNOだ。つまり……この夏、大変なことになりそうだ。

第2話 初めての救済

俺が一度死んでから三日がたった。奇跡的に（おそらく神の力で）無傷だった俺は次の日から学校に行き、放課後には人通りの多い交差点などに出向いてもみたが人の死には出くわしていない。まあ当然と言ったら当然だ。

四日目の学校が終わりため息がでるのも当然と言ったら当然だった。クラスでは今まで通り明るく振舞っているから余計にだ。

「やっぱり無理だよなあ……」

教室を出て一人呟く。

それに「どうした？」と反応してくれる人はいなかった。

外は雨が降っていた。他の生徒は傘や雨合羽を鞆から取り出している。天気予報など見ていない俺は当然そのようなものは持っていない。何せ朝は晴れていたのだ。

しかたなくそのまま外に出る。そこまでひどい雨ではなかった。このぐらいだとパンツまで濡れるということはなさそうだ。

急ぐ必要はなかったので俺はゆっくりと学校をですぐの坂を下っていた。坂には俺と遙か前方にいる傘を差した女子生徒しかいない。顔は見えないので誰かまではわからなかった。

前方の歩行者用信号が点滅し始める。それを見てした女子生徒が小走りに横断歩道を渡り始めた。

事件はそこで起こった。

向こう側から左折しようとした單車がマンホールでタイヤを滑らせた。乗っていた人は車体から離され、單車だけが横断歩道へと突っ込む。そして女子生徒に激突した。

俺は握りかけていたブレーキを離し女子生徒のもとへと急ぐ。

そして車道の隅に倒れている女子生徒の顔を見て驚いた。同じク

ラスの磯村さんだった。

磯村さん、と呼びかけてみても何の反応も示さない。

死んだのか……？

単車の運転者は青い顔をしていた。

俺はこれがチャンスだということに気づくまでしばらく時間を要した。

そして少し躊躇いながら、声に出さず、時間よ戻れと念じてみた。すると、磯村さんの隣にいた俺は少し不自然な動作で自転車にまたがり後ろ向きに坂を上り始め、単車の運転手も単車にまたがり後ろ向きに反対の坂を上り始める。そして磯村さんまた横断歩道に戻り後ろ向きに坂を上り始めた。

巻き戻しが終わったのは俺が坂を上りきる少し手前だった。

少し戸惑いながら今度はちゃんと坂を下り始める。先ほどと同じように信号が点滅し始め、磯村さんが急ぎ始めたところで俺は叫んだ。

「危ない！！！」

俺は人生で一番大きな声を出したと思う。

反対側の歩道を歩く人やグラウンドで雨にも関わらず練習をしているサッカー部員までもが俺の方を向いた。

もちろん磯村さんも走るのをやめこちらを向いた。そしてそのすぐ先にスリップした単車が突っ込んだ。磯村さんは大きな音に驚き単車の方を一度向き再びこちらを向いた。

「ねえ、斉藤君」

追いついた俺に磯村さんは言った。

「こういうときって110か119かどっちに電話すればいいんだと思う？」

とても冷静な質問だ。

見ると単車の運転手は大した怪我ではなさそうだった。

「えっと、119はいんじゃないか。ほら、単車の人そんなにひどそうじゃないし。110も別に事故って訳でもないし大丈夫だろ」
「でもガードレールあんなになってるよ」

と磯村さんは無残にひしゃげてしまっているガードレールを指差している。

「さ、さあ俺詳しいことはよくわかんないし」

「そっか……。私も面倒臭いのは嫌だからやめとくね」

「う、うん」

これ以上話したら面倒なことになりかねない。俺はその場を立ち去ろうとした。

「じゃあ、俺はこれで」

自転車にまたがった俺の背中に磯村さんは声をかける。

「斉藤君」

呼びかけられたら振り向かずにはいられない。

「なに？」

「偶然じゃないんでしょう？」

「まずい……。」

「なにが？」

答えは分かっているが一応聞いてみた。

「私を呼び止めたの」

「偶然だよ」

「違うよ。だって斉藤君は私を呼び止めるとき「危ない」って言ったもん。でもあのときは何も危なくなかった……」

「……………」どうやらもう逃げることはできないみたいだ。

結局僕は磯村さんに全てを話すことになった。

磯村さんは最初は当然信じてくれなかったけど、それを否定することができず、あの場面での辻褄も合うということで信じてくれた。最後にこのことは誰にも言わないと約束までしてくれた。

そこまではよかった。でも別れ際の一言。

「斉藤君、私もこのこと手伝っていい？」

「はい！？」

「うん。だってどう考えても斉藤君一人じゃ無理だもん」

「いや、確かにそうだけどさ」

「だめ？」

う、磯村さんそんな悲しそうな目で見るのはやめてくれないかな。

「い、いいよ」

こうして磯村さんは僕を手伝うことになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8002i/>

時を巻き戻す救済者

2010年10月8日15時15分発行